〔類聚名物考飲食一〕紅糟粥　うんざうがゆ　温糟粥

十二月八日に奉る也　尺素往來、神樂寒更之紅糟は臘八之佛供、　或書云、十二月八日、釋尊此曉に明星を見て成道し給ふ朝なれば、禪家の僧、夜中座禪して、曉に粥を煮て、佛に供し我も食也、臘八の粥といふ是也、

今案に臘八紅糟とは、臘沓子の事也、守護國界主陀羅尼經、九臘沓子の事有て、希麟音義云、徒合反、考聲合也、說文從水音別、與雜還字義同、經文從水、舊作沓、或作沓誤書也、案臘沓子者、以五穀雜合一處、用以加待、如今俗言臘雜子也、と見えし物也、

温糟粥　櫃司ヨリ十二月八日上之、　かゆにみそ幷酒のかすを少し四角にきざみてにる、　又温糟、本作紅糟、出于勅修清規、即赤豆粥之類也、　下學集曰、紅調粥、正月十五日赤豆粥也云々、紅調蓋紅糟訛轉也、　貞丈按に、アヅキガユの說難信歟、

○紅糟粥ノ事ハ、歲時部歲暮篇臘八條ニ詳ナリ、

〔倭訓栞前編五〕をばながゆ　禁中に八朔に用ゐさせらるゝ也、康富記にも見えたり、昔は薄の黑燒を粥に雜えたりし、今は早稻の黑燒を合すといへり、內々行事には、米の粉を黑胡麻にて煉交たる也と見ゆ、

〔類聚名物考飲食一〕尾花のかゆ

この事よくもしれぬ事也、薄のあくにて染るなどもいへれど、是もしるしとすべきこともなし、尾花栗毛などいふ馬の毛色なども有をおもへば、うす赤き色なるべしとおしはかる、南史の任昉が傳に、唯有桃花米廿石といふこと有、これも色によりての名とぞ思はるゝ、また留青日札に、桃花飯言飯紅潤之色といふによれば、これらやあたるべきに似たり、されどもいかなるわざをして色をつくるにや、また自なる色かもしるべからず、或人は今此方にていふトウボウシといふ

尾花粥